

イントの紹介から描かれる。年齢や信仰の違いを越えて、ともに手を携えて生きた夫妻の活動が詳述されている。いずれにせよ、これまでのフランクルの生涯と思想が、時代背景とともに厳密に展開されており、フランクル研究にとって、必読の書と言えよう。

ところで上記の研究書・入門書のアプローチの中心は、カウンセリング（心理学）的立場、もしくは教育（哲学）学的人間学・宗教哲学にその比重が置かれている。そうした意味で言うと、以下の二つの翻訳本は、少し時代は下るが、ともにフランクルのロゴセラピーをキリスト教信仰の視点から論じられている点で共通する。

⑦ Donald F. Tweedie, *Logotherapy and the Christian Faith*, Baker Book House, 3 Auflage, Grand Rapids,

Michigan, 1961-1972. ドナルド・トウィディ著、武田健訳、『フランクルの心理学』、みくに書店、一九六八年

本書は、フランクルの弟子の一人である著者トウィディ（米国人）自身がキリスト教信者という立場を鮮明に表明しており、クリスチャン治療者としてのフランクル思想への取り組みが前面に押し出されている点で、先に紹介した日本国内の研究書と一線を画するものと言えよう。さらに本書は、「フランクルの思想的背景はもとより、多くの先駆者に対するフランクルの関連と批判を示すとともに、彼の精神医学の理論的体系と治療方法を極めて平易に、しかも相当深く、系統だつて解説⁽²⁷⁾」しているところにその特徴が見出せよう。

また⑧の『イエスとロゴセラピー』は、キリスト教の側からロゴセラピーを解釈している点では、異色な著作である。

⑧ Robert C Leslie, "Jesus and Logotherapy" Abingdon Press Nashville N. Y. 1965 ロバート・C・レスリー

著、萬代慎逸訳、『イエスとロゴセラピー』ルガル社、一九七八年

本書は、人間が生きているとはどういう意味を持つのかを知るために、現代の諸課題を踏まえたうえで、論じられてい